

# 南アジア銅石器時代・青銅器時代の編年

上杉彰紀(総合地球環境学研究所) ・ 近藤英夫(東海大学)

## 1. はじめに

南アジアにおける銅石器時代・青銅器時代の編年は 1920 年代に発見されたインダス文明の年代を軸にしている。すなわち、相対編年の上ではインダス文明より古いか新しいか、実年代の上ではメソポタミア文明との併行関係をもとに提示された年代観よりも前か後かということである（いまなお先ハラッパー文化期、ポスト・ハラッパー文化期という表現が一般的である）。1940 年代以降には層位発掘手法と編年上の鍵となる特徴的な遺物（主に土器）の抽出が一般化し、インダス文明以前の文化の存在が各地で注目されるようになった。結果として、相対編年の設定と地域編年の充実が進められてきたが、そこに 1960 年代以降 C-14 年代測定が断片的ながら持ち込まれ、相対編年の深化よりも実年代観の把握に重点が置かれるようになったのである。

いまでもなく遺跡・地域の相対編年の充実と遺跡・地域相対編年間の整合を前提とした上で、理化学手法による年代測定値との対比による双方向の検証が求められる。南アジアの銅石器・青銅器時代の編年研究において求められるのは、理化学手法測定値の検証を可能とする地域相対編年の充実であろう。相対編年の充実によって、地域社会・文化の変遷の過程や地域間交流の様態の復元など、多くの課題を見出すことが可能になる。

本発表では上記の視点から、前 4 千年紀から前 2 千年紀前葉にかけての地域相対編年と地域社会の変容過程について仮説を提示することとした。

## 2. 編年に関する研究抄史

### (1) 初期の編年研究

初期の編年研究は、A. H. セイスや G. J. ガッドの研究に代表されるように、メソポタミア地方から出土したインダス系器物の検討に基づいて行なわれた。また、バローチスタン地方では 1920 年代から踏査や小規模な発掘調査が行なわれてきたが、出土土器の比較検討に基づく相対編年案も西方との比較を中心としていた。その代表的な研究として、H. ハーグリーブス、A. スタイン、S. ピゴット、D. H. ゴードン、W. A. フェアサービス、B. ド・カルディらの研究がある。

### (2) 放射性炭素年代の使用

実年代の決定に C-14 年代が多用されるようになるのは 1960 年代からである。以後、現在にいたるまで南アジアの編年研究は放射性炭素年代に偏重する傾向にある。代表的な研究として D. P. アグラワ

ールと S. クスムガールによる一連の研究、G.F. デイルズ、J.G. シエイファー、G.L. ポセール、徐朝龍などの研究が挙げられる。

### （3）近年の調査と編年研究の進展

バローチスタン高原からインダス平原にかけて、層位的に出土遺物の変遷を追うことのできる遺跡の調査成果が蓄積されつつあり、大枠としての土器編年が構築されつつある（例えば、アムリー遺跡、ムンディガク遺跡、シャフリ・ソフタ遺跡、メヘルガル遺跡、ナウシャロー遺跡、ナール遺跡、ミリ・カラート遺跡、ハラッパー遺跡など）。こうした大枠の編年の中で、型式学的な検討によって遺物の変化のあり方を具体的に検討する試みが、近藤英夫を中心とする日本人研究者グループとペシャワール大学が合同で進めているグムラー遺跡とラフマーン・デーリ遺跡出土資料の再整理という形で行なわれている（2003 年度以降）。

## 3. 編年上の併行関係からみた地域間交流（第 1 表）

### （1）前 4 千年紀前半 地域社会・文化の形成

前 4 千年紀前半にさかのぼる遺跡は限られるとともに、それぞれの地域の間で明確な交流関係を示す証拠は稀薄である。その中で、バローチスタン高原中央部（メヘルガル遺跡Ⅲ期）では横向きの動物文を文様帶内に連続的に施す土器があり、同様の配置をみせる動物文がバローチスタン高原北部のゴーマル・バンヌー地方（シェーリ・ハーン・タラカイ式土器）にもみられ、ともにイラン高原との関係を示唆する点で重要である。

### （2）前 4 千年紀後半 地域社会・文化の拡大と地域間交流の発達

前 4 千年紀の後半期には、各地域で地域色豊かな彩文土器様式が成立する（ケチ・ベーグ式土器、トチ・ゴーマル式土器、ナール式土器など）。各地域の土器様式は異なる器種構成や彩文構成をみせるが、文様要素には地域間での緩やかな交流関係の存在を窺うことができる。その交流圏は連鎖的にイラン高原からバローチスタン高原、インダス平原に広がっていたと考えられる。各地域に形成された社会・文化が統合されることなく緩やかな交流ネットワークによって結びつけられていた時代である。

### （3）前 3 千年紀前葉 地域間交流の拡大と地域社会の再編 初期ハラッパー段階

インダス文明期の前段階に位置づけられる初期ハラッパー段階には、前代の等質的・連鎖的な地域間交流ネットワークに大きな変化がみられるようになる。それは広域に及ぶ地域社会としてのまとまりの強化である。インダス平原部では、北のゴーマル地方からパンジャーブ地方西部、シンド地方にかけて単純な彩文を特徴とするコート・ディジー文化が展開する。バローチスタン高原中央部ではファイズ・ムハンマド式土器やジョーブ式土偶を特徴とする地域文化が形成される（メヘルガル遺跡 VI・VII 期）。さらにパンジャーブ地方東部では、ソーティ・シスワール文化が展開した。

初期ハラッパー段階からインダス文明期への変容期（前 2700～2600 年頃）においては、地域間交流の様態に変化がみられる。バローチスタン高原中央部とシンド地方との関係が強化される一方で、高原部から平原部にかけて広がる重層的な地域間交流ネットワークが成立した。こうした地域間交流の重層化・多方向化の中で、次段階における地域統合、すなわち文明社会の形成の基盤が形成されたと考えられる。

#### (4) 前3千年紀中葉 地域統合とインダス文明社会の成立

インダス文明期には前代の地域間関係を統合した広域に及ぶ地域社会構造が形成された。基本的に前代の地域社会群を基盤としているが、その関係性を大きく再編する形で文明社会が形成されたと考えられる。インダス式印章やハラッパー式彩文土器は厳密な意味で前代に型式学的祖形を追うことは難しく、社会の再編期に広域に及ぶ地域社会の統合を表象する器物として創出された可能性が高い。

文明社会の成立を型式学的に検討する醍醐味がここにある。

#### (5) 前3千年紀後葉 西南アジア世界の再編とインダス文明社会の展開

インダス文明後半期にはイラン高原からペルシャ湾岸における地域間構造の変化に伴って、インダス文明社会にも変化が生じる。バローチスタン高原南部では在地の集団とイラン高原東南部の交流のもとでインダス文明、イラン高原、ペルシャ湾岸を結ぶ役割を果たしたクッリ文化が成立し、中央アジア南部ではイラン高原との関わりの中でバクトリア・マルギアナ考古文化複合が出現した。また、ペルシャ湾岸にはバールバール文化が発展する。こうした動きの中で、インダス文明社会内部では、インダス平原中央部では前代の土器様式が著しく変容してクッリ文化の影響が強くみられるようになるとともに、パンジャーブ地方東部やグジャラート地方で遺跡が増加する。すなわち、前半期を特徴づけた広域に及ぶ文化統合は弱まり、地域性の顕在化が進む。

#### (6) 前2千年紀前半 インダス文明社会の解体と地域社会・文化の顕在化

インダス文明の衰退とは、広域な地域を統合する社会的基盤の弱体化と広域社会構造の解体を意味している。地域文化の顕在化はすでにインダス文明後半期に生じていたが、前1800年頃から前1500年頃の時期には各地に特徴的な地域文化が成立する。これらの地域文化はいずれも狭域型であるが、それに相互の交流関係が認められ、緩やかな交流ネットワークが形成されていたことが推測できる。それはインダス文明社会のような広範な地域統合を志向する性格なものではなく、イラン高原からインダス川流域、さらに、東方のパンジャーブ地方やグジャラート地方の地域社会構造は流動化することとなった。

### 4. まとめ

インダス文明期以前の時期にはバローチスタン高原からインダス平原にかけて各地でさまざまな地域社会・文化が展開したが、それらの地域社会・文化が互いに関係を構築していたことがインダス文明社会の形成にとって重要な要因である。こうしたインダス文明社会以前の地域社会群は必ずしも固定的なものではなく、流動的にその関係を変容させてきた。こうした流動的な地域間関係を強化・統合して成立したのがインダス文明社会である。

インダス文明期においても、その地域範囲あるいは文明圏内に含まれる地域社会間の関係は必ずしも固定的ではなかった。さらにインダス文明社会の衰退は文明期の強力な地域統合システムを解体し、新たな地域間関係の成立をもたらした。

編年研究は時間・空間軸上における物質文化の変化を理解する上で欠くことのできない研究分野である。C-14年代測定はおおよその実年代を把握する上で有効な方法であることはいうまでもないが、それによって物質文化の変化そのものが明らかにできるわけではない。型式学的研究は細分主義に陥

る危険性をもつが、物質文化の変化を復元する上で重要である。いかに変化を把握し、時間・空間軸上に位置づけていくかが求められるところである。とりわけインダス平原周辺地域のように多系統の文化伝統が流動しながら展開した地域においてこそ、型式学的検討の重要性が認識される必要がある。

本稿の作成にあたっては、東海大学大学院生・小茄子川歩氏の協力を得ました。銘記して感謝申し上げます。また、紙幅の関係上、引用・参考文献を割愛したことをお詫び申し上げます。

(参考文献)

近藤 英夫・上杉 彰紀・小茄子川 歩・米山あかね 2006「インダス文明の形成に関する研究」日本南アジア学会ポスター発表

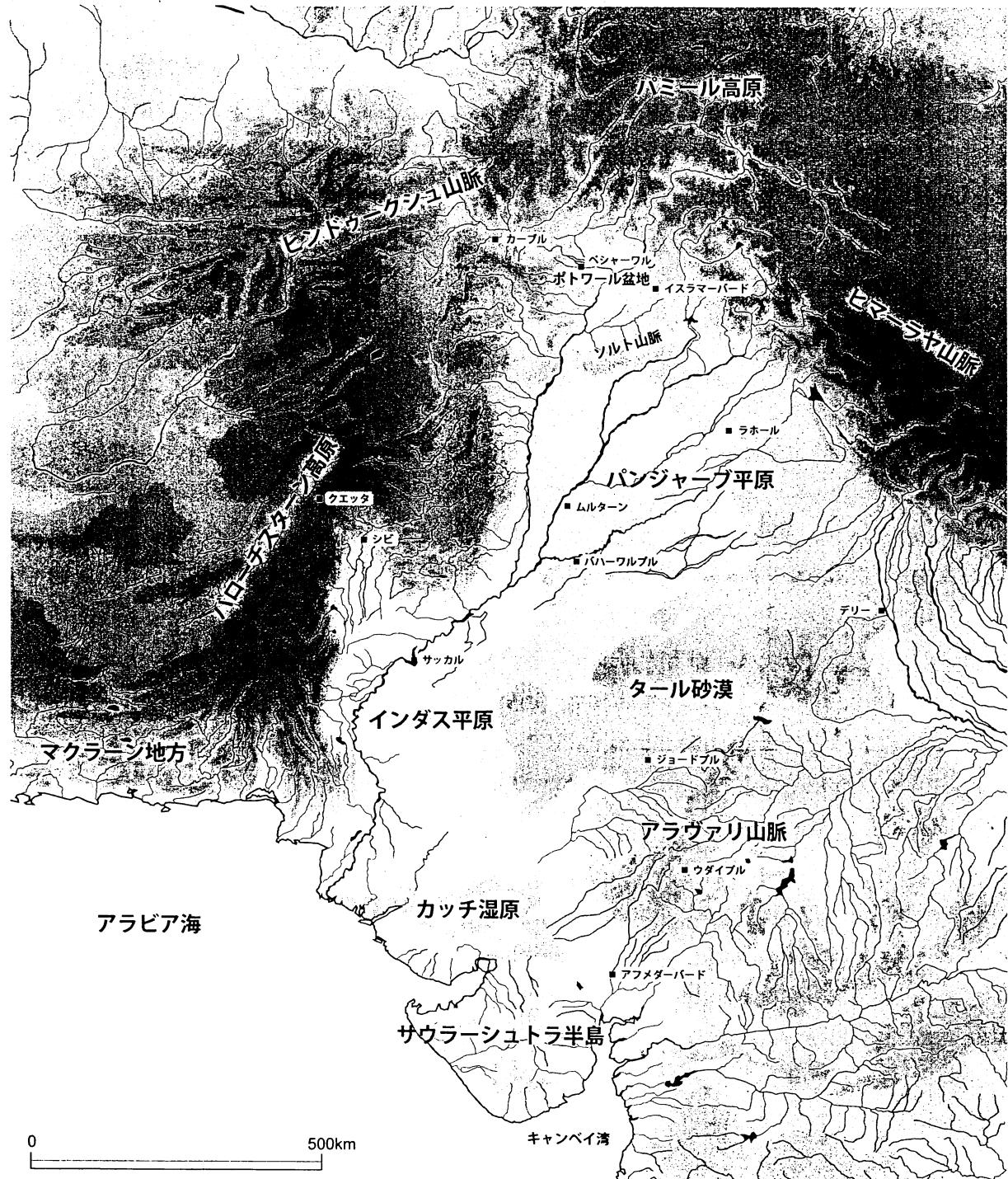


図1 インダス川流域地域区分図（上杉作成）

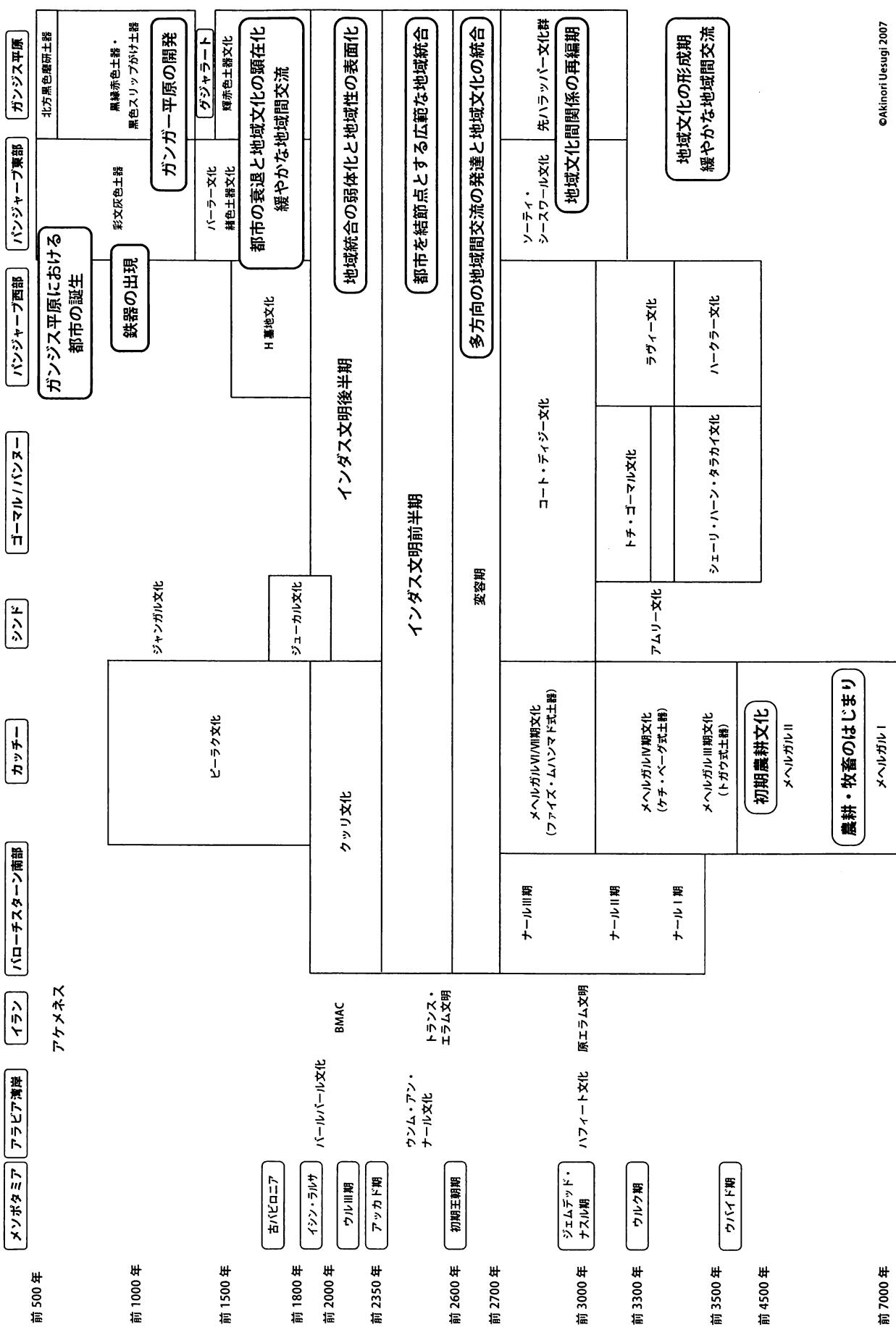


図2 編年表（近藤ほか、2006を改変して上杉作成）